二等賞

富士山に遊ぶの記

早川蓉堂

冨士の高嶺に登る道は、十五ありと、いにしへより呼び慣はしたれども、神さびたる祠の甍を連ね、文人雅士の舊跡を餘し、遊客なほ行交ふは、甲州吉田口に勝るは無し。平成癸巳の年、水無月の末つかた、世界遺産に錄せらるれば、富士の山の事、學びて見むかしとて『冨士山眞景圖』『冨士山緣起』など舊幕の古書をひもとくに、そもそも冨士山は三國無雙の靈山、佛神の常に居ます浄土、仙客の來たり遊ぶ寶境にして、參詣の人は極楽往生疑ひなしと記せば、今の人の物見遊山あるひは身の鍛錬とは大いに異なるを知りぬ。又曰く、吉田口はことに古くして、景行天皇の御時、日本武尊、敕命を受けて草薙劍にて草木を拂ひ、麓より頂に至るこそ、道の開き始めにして、時に詔を傳へて「冨士は北口より登るべし」と曰へば、後の世の道者、登拜せること稻麻竹葦のごとしとぞ。いと心魅かれ、興ありと覺えしかば、いざ、これらの古き書を道しるべとなし、吉田口より冨士の頂きに遊び、昔の人の心を知らばやとて、地圖をひらきて道を調べ、衣服・雨具など購ひ整へぬ。

葉月の初め、晝頃、新宿の驛より車に乘り、一刻ばかり經て富士吉田驛に降り立てば、都とはうち變はり、清らかなる風、早や秋に通ひていと涼し。吉田の街には、なほも「御師」と名乘る宿坊あり。大雁丸・淺間坊・大注連などといふ屋號、いと珍し。筒屋といふ名の御師、聖德太子につらなる家柄にして、

我が今宵の宿なり。門口には、ひと筋の小川流れて、瀧を作り、眞白なる雪を噴き出だす。戸を叩けば、主なる媼出でて迎へ、座敷に入れば、柱間には三條公の扁額、また乃木將軍の感狀ありて舊家の風格おのづから身に迫る。座敷の奥の庭に、別に立てたる神殿あり。注連縄の眞白き御幣、風にそよぎ、御鏡・燈臺などみな古き物にして、道者の數多詣でけるといふ昔のことぞ偲ばるる。夕餉は手作りの鯖の煮付けに、山椒の鹽漬けを添へ、なつかしき味はひなりき。

宿を立ち出でしは、旭のさし初めたる卯刻ころなり。よく晴れ渡りたる朝にて、我がいでたちは、頭に檜笠をいただき、身に白裝束をつけ、腰に鈴を下げ、手に金剛杖を携へ、脚に白足袋を履き、いにしへの人のままなれども、背に負ふ荷のみ今めかしきは、せむかたなし。

吉田の街を上り行くに、杉・檜の鬱葱として茂りあふ處こそ、北口淺間の御社にして、石燈籠の苔深く、靜かに竝び立てるも、いみじう氣高し。鳥居は高さ五丈八尺五寸にして、木造りにては日本一なり。「三國第一山」の御額は良知法親王の水莖の跡にして、初めの一筆の鳥に象れるは、鳥居の額をしたたむる時の故實とかや。手水舍には青銅の龍の口より水を吐き、鑄物の造りかた、ことに優れたり。拜殿の柱間には、赤と黑との天狗の神像を掛け、眼差しなど生けるが如く、夜はさぞ恐ろしからまし。内陣のきらきらしき黄金の御戸には、松竹梅を描き、うちに祀るは、冨士の山の神、淺間大菩薩、神の名にては木花開耶姫と申し奉る。柏手打ち鳴らし、掌を合はせ、山道に恙無きことを祈れり。

社の裏には「登山門」といふ名の白木の鳥居あり。くぐりて少し歩めば、左に「大塚」といふ小高き丘ありて、日本武尊、遙かに冨士を望みたまふ古跡なりと傳ふ。裾野の道は平らかにして、翡翠の草原に、

朝まだきの柔らかなる光さし入り、白珠の露のかかやきは目を奪ふばかりなれど、貫き止めぬものなれば、こぼれて散るも、いとをかし。中の茶屋・躑躅ヶ原にて少し休み、御馬返しにて朝餉をとる。これより上、いにしへより「合」と稱へて道のりを示すは、山の形、米を積み重ねたるに似るがためなりける。十圍にあまる樅の古樹多く、女蘿を掻分けて進むに、一合目鈴原に到りぬ。鈴原には、淺間の本地なる大日を祀れり。麓の神官「御大日」といふ家には、なほも如來の尊像を置き奉り、朝夕の勤行、かつて怠ること無しとぞ。

大雨の度重なれるにや、山路は大いに穐ぐれて澤の底を歩む心地す。綠の葉、涙やかなる影を落とし、さやげる響きは耳を洗ふ。谷間を隔つる岸より、嶮嶮と鳴き交はし、野の草を食らふ鹿の声聞こゆ。名も知らぬ山の花、白あるひは紅に蕾をほころばせ、胡蝶は鮮やかなる羽を翻し、飛び來たりて蜜を吸ふ。二合目「小室淺間」は、聖德太子の建てさせたまふ宮なりける。武田機山公、尊崇いと厚くして、本殿を造り營み、しばしば大般若轉讀せしめける。近き年頃には脩むる人も無しと見えて、社殿　然として猶ほ存すれど、雨風のために破られ、歩み入りて首を廻らすに、もし山風の至りなば、ただちに梁砕けて柱折れなむさまにて、身の毛も太るばかりなり。世界遺産とて下界の人どもみだりに騒ぎののしれども、山の中にては斯樣にて、神の御社、ただ朽果つるを待つばかりなり。三合目「中食堂」、四合目「開運大黒天」みなすでに崩れ落ち、ただ悲しきのみなり。四合五勺「御座石淺間」は鬱として崔嵬たる宮殿、磐石のかたはらに聳え、昔を偲ぶべき姿なれども、何時までかは。吉田口のかくも衰へたるは、昭和三十九年、五合目まで車の道を開きしがためなりける。うたてしや、山はおのれの腳にて登りてこ

そ、心地よくもあらめ。

晝下りに五合目「佐藤小屋」に到れば、冨士松の葉の甘き香り、いとも清らかに漂ひ、晝餉として珈哩拉麺を食らふに、味ひ宜しく、また主人と語れば「明日は晴れなるべし」といふ。經ケ嶽・不淨ケ嶽を過ぐれば、豁然開朗として草木無く、みな燒山なり。足元には輕石多く混じりて歩み難く、いつ果つるとも知らぬ羊腸の小道、延延として連なる。西のかた銀に染まれる波の間に、大橋のかかるは河口湖なるべく、また東に見ゆる勾玉のかたちは山中湖なるべし。七合目「花小屋」より上はみな岩場の道にして、鎌岩・駒ケ嶽・太子館を過ぐるに、崎嶇險峻にして、息もおぼつかず、十歩にひとたび休み、飴を食らひて水を飲む。蓬萊館の東に、「龜岩」といふ岩、大龜の山を下るかたちに聳えたるは、いと興多かりし。

日は遠景になりにたれども、我が行く先は遙かにして、九十九折の道を、やうやう歩みを運び、元祖室に入りしは日の沈む少し前なり。この地を「烏帽子岩・身祿ケ嶽」と名づくるは、享保十八年の夏、冨士講の身祿尊者、斷食して卽身入定せしがためなり。尊者が遺骸、石櫃のうちに納めて烏帽子岩の根に埋めてありけるが、髪なほも生え續け、手に三光の印を結び、眠りたるが如しとぞ言ひ傳へたる。冨士講これより榮えしかば、尊者を呼びて「元祖」となし、小屋もまた古き名を守る。夕餉は珈哩にして、福神漬けをほしいままに取らしむれば、辛さと甘味と、よく相和して、いと美味し。

少しまどろみし後、寅上刻に元祖室を出でて登り始めぬ。西風いと激しう吹き、杖を持つ指も凍てつくばかりなり。身を動かせば溫かなれど、少し休めば耐へがたし。八合目大行合を過ぐれば、北斗七星の

柄傾きて、昴のかすみゆく空に、やうやう明けの明星あらはれ、ご來迎も間近なるべし。近き年頃、頂きにて旭を見むとする人多けれども、昔は九合目「日御子」にて、日の出を彌陀三尊の來迎になぞらへて拜みしなり。九合目には小屋と社の跡のみ殘り、石組みの陰にて風を避け、ご來迎を待ちゐたり。東雲の空すでにあかみて、眞下には縹渺たる雲海を望み、やがて照りかかやく圓きもの昇り來たり、紅の光はるかに迸り出づれば、兩手をあはせ、十念また般若心經一卷を唱へて供養とす。日の出でし後は、風もやみ、少し溫かになりぬ。「日の御子」より上は「胸突八丁」なれば、頂きは近く見ゆれど、山の空氣いみじう薄く、息苦しさのみを覺ゆ。

頂きの前に白木の鳥居あり。立柱、細かに縱に裂けたるうちに錢を差し挾み、人みなこれに倣ふ。石段を登り果てしところは頂きにして、久須志神社に詣でて伏し拜む。山小屋に入りて、甘酒など飲み、少し休みしのち、觀音ヶ嶽の傍らより「內院」の火口に臨めば、萬年雪いと白くして皎皎皚皚と眼を照らし、空の靑さに映え、華嚴の寶閣の幻、忽ちに現はれたるが如く、胸の高鳴るを覺ゆ。「內院」のうちに錢を投入れ、初穗に供へ奉る。頂きは一里ばかりにして、八つの峰あり。もと藥師ヶ嶽・觀音ヶ嶽・阿彌陀ヶ嶽・駒ヶ嶽・文殊ヶ嶽・劍ヶ峰・雷ヶ嶽・釋迦ヶ嶽などと名づけしを、明治の初めに佛菩薩の名を改めて久須志ヶ嶽・朝日ヶ嶽・伊豆ヶ嶽・三島ヶ嶽・白山嶽となす。また今の人は火口を「お鉢」と稱ふるが故の「お鉢廻り」とばかり知れど、さには非ずして、古くは八つの峰を「八葉蓮華」と見なし、佛神を拜みて廻るを言ふなり。

觀音ヶ嶽より歩み出だし、八葉を廻り、賽の河原・銀名水・大宮・徐ヶ池などを經て、馬の背の險しき

坂を越え、劍ケ峰に登りぬ。この峰は最も高く、海拔三千七百七十六米あり。幼き頃ある人の教へて、「冨士は尊き山なれば『みな南無』（三七七六）と拜むと覺えよかし」といふこと、そぞろに思ひ浮かびぬ。

劍ケ峰の鐵梯子を下り、雷ケ嶽より外回りに進み、「釋迦割石」に出づれば、裂けむとするが如き大岩、虚空に向かひて聳え立つ。この地、山中第一の靈場にして延寶の頃、案山禪師および弟子の久圓禪師、斷食して卽身成佛す。元祖室の身祿尊者もまたこの地にての入定を志しけるが、大宮の役人に妨げられて北口に下りしに、「身は烏帽子岩に朽つるとも、心は長しへに釋迦割石にあり」と曰ひしとかや。危ふき岩の路を攀ぢ、北のかた釋迦ケ嶽の頂きに立てば、昨日より我が登り來たれる道筋、すべて眼のうちに収まり、麓の街は歴歴として細かに見え、衆山みな小さくして畏れひれ伏すが如く、眦を決して萬里はるかに眺むれば、ただ蒼きを陸と思ひ、まばゆき光の浮かべるを海なりと知る。

時も移りぬ。白雲のうへの土をまた踏むはいつの日とも知れざれば、足とりも躊躇し、名殘は盡きねども、下るもまた遠き道のりなれば、日のすこし中空を過ぎし頃、頂きを立ち去りぬ。